17　広報誌の記事「市立図書館紹介」／「私の町の公共施設紹介」

これは、A市の図書館を紹介する広報誌の記事です。
P. R. magazine

A市には、市立図書館が八つあります。A市総合図書館は、その中で、いちばん新しくて、大きい図書館です。本の数も種類も多くて、たいへん便利です。

A市総合図書館は、A市の西の松原浜という所にあります。地下鉄の西町駅から歩いて十分ぐらいです。バスなら、図書館のすぐそばにバス停があります。

A市総合図書館は、A市に住んでいる人と、A市内の会社や学校に通っている人は、誰でも利用することができます。外国人も利用できます。開館時間は、火曜日から土曜日までは、午前十時から午後七時までで、日曜日は午前十時から午後六時までです。月曜日とその月の最後の日が休みです。

A市総合図書館には、七十万冊以上の本があります。日本の本だけではなくて、外国の本や雑誌や新聞もたくさんあります。子どもの本もたくさんあります。ビデオやCDもあります。

本を借りたい人は、貸し出しカードを作らなければなりません。貸し出しカードは、学生証や健康保険証など、住所がわかるものを持って行けば、係の人がすぐに作ってくれます。本は、一度に十冊まで借りることができます。貸し出し期間は、二週間です。雑誌やCDも借りることができます。ビデオは、借りることはできませんが、図書館の中で見ることができます。本を返す時は、自分の家の近くにある別の市立図書館に返すこともできます。

総合図書館の中には、レストランもあります。また、図書館の中にあるホールで、日本の古い映画や、アジアのいろいろな国の映画を上映しています。

20　意見文「早期教育の是非」／「私の意見」

次の文は、新聞の社説です。

「自分のこどもを少しでもよくしたい」とどんな親でも思うだろう。親たちにとって、「こどもの脳は無限の可能性を持っているから、早い時期に教育を始めれば、どんなこどもも、すばらしい能力を獲得することができる」という主張は、大変魅力的である。そこで、2歳や3歳のこどもに字を教えるビジネスや、外国語や楽器演奏などの訓練をするビジネスが現れ、現在大変人気がある。しかし、早期教育は、本当にこどもにとっていいのだろうか。

「能力は、一番よく育つ時期があって、その時期を過ぎるとあまり育たなくなるから、なるべく早く教えてどんどん訓練した方がいい」という考え方は、1960年代以降のアメリカで非常に人気があった。この時代には、成績が大変よいこどもは「飛び級」をしたので、16歳で大学を卒業した者もいた。しかし、20年ぐらいの間に飛び級をしたこどもたちを調査すると、そういうこどもたちには、心理的なストレスが非常に大きいという問題があることがわかった。飛び級をしたこどもたちは、まわりの友だちとの間に精神面*でギャップがあって、背伸びをしなければならない。そのために、思春期*を過ぎた頃から、神経症*になったり、暴力*に走ったりするようになって、結局、勉強も続けられなくなった場合が多いのである。勉強がよくできても、精神的に安定していなければ、その人は幸福ではない。今は、飛び級をする人はほとんどいなくなった。

確かに、早く字が読めるようになったこどもは、小学校に入ったとき、成績がいい。最初の段階で自分に自信を持つことができるのはいいことであるかもしれない。しかし、6歳のこどもはひらがなを1週間で覚えられるが、2歳半のこどもは半年から1年もかかる。こんなに小さいときに、こんなに時間をかけて人より早く覚えることが、本当に必要だろうか。早期教育のプログラムに申し込む前に、親はもう一度よく考えてみる必要がある。

＊精神面　せいしんめん　mental aspect
＊神経症　しんけいしょう　neurosis
＊思春期　ししゅんき　adolescence
＊暴力　ぼうりょく　violence